潮　流

金融 IT は幻か

専任研究員　　田代　雅之

『IT革命？そんなものはない』と題する新書が 20 年ほど前に刊行された。Googleも誕生していない頃の勃興期のバーチャルモールやeコマース、インターネット等のITの有効性に異論を唱えたものだが、同書の懸念のあらかたは覆されたと言っていいだろう。それほど、情報技術の進歩が速かったということでもある。しかし、「ITは現実社会の写し以上のものではない」という同書の批判の当否については、まだ結論が出たわけではない。次世代通信規格（5G）や自動運転技術、機械学習やシンギュラリティ等々、夢あるいは悪夢のような未来が予見されもするが、前世紀から情報化社会論が指し示す産業革命に類する革新が到来しつつあるとみるにはまだ距離があるような気はする。

金融ITを巡り様々な影響が取りざたされる。FinTechと呼称される分野では「融資」「決済」「個人資産管理」「資本制資金調達」「投資サポート」「経理税務サービス」「送金」「個人向け金融」といった多方面にわたる金融サービスの高度化が取り組まれており、その結果として、従来型の金融事業の行き詰まりが指摘されてもいる。昨今の収益環境の悪化もあるが、「銀行不要時代」まで唱えられ、新卒採用市場における金融機関の苦戦も伝えられる。仮想通貨の利用拡大やキャッシュレスの普及からは、既存の通貨秩序を覆す懸念も生まれる。デジタル人民元への動きを発端に中銀デジタル通貨の議論も活性化しつつあると伝えられ、金融秩序全般の不安定化への不安も潜む。

FinTechの進展は金融の産業構造や市場構造を革新する端緒となるのだろうか。前掲の新書に先立つ時代に、筆者は某書に銀行のコンピュータシステムの流れを時系列に描いた。その先端はポスト第 3 次オンラインを臨み、分散化やオープンシステム化を展望するところで途切れていた。1 次から始まるオンライン化、分散化、ERP、DSS、SIS等々、金融を巡ってはその後も様々なキャッチフレーズで新基軸が唱えられ、莫大な資金が投入され続けた。それらは各時代の要請に応えるものであり成果も生み出してきたが、金融機関経営や社会構造の根幹をも革新するデジタル化（Digitalization）には遠く、金融の情報化は現実社会の写し（Digitization）以上ではなかった。銀行のシステム化の発端が事務の合理化であり、システム開発の発意・決定と運用システムの評価の主体が実質的に利用部門だったのだから自然の成り行きではあった。

コロナウイルス禍においてやむを得ず対応した在宅勤務等体制の浸透も睨みながら、全面的なITの活用や金融ITの普及は確定的とする論調も巷に流布されるものの、金融ITは幻ではなくITを起点にした金融の革新は「きっと来る」と言い得る確信まではない。しかし、今は亡き某評論家の言を借りれば「知識や科学技術を元に戻すことはできない」のも事実ではある。金融機関は再編成の時代を迎え金融の様相も大きく変わるのかもしれないが、そこでもIT技術を無視はできない。金融ITにより現実社会がどのような変質を遂げるのか見通し難いが、欠陥や未熟を克服しながら前へ進む以外にはないのだろう。

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます